

# じっきょう

## 地歴・公民科 資料 No. 75

|         |  |
|---------|--|
| もくじ     |  |
| 巻頭      | 外国で「世界史」を語る／飯島 渉…………… 1                              |
| トピックス 1 | 高校生に学ばせたい労働現場の問題と解決策<br>／川村 遼平…………… 6                |
| トピックス 2 | 「無意識の植民地主義」を意識化することから始めよう<br>／知念 ウシ…………… 10          |
| 実践報告    | 高校生がガイドする地域の歴史<br>～ESDを意識した日本史の授業～／川島 啓一<br>…………… 14 |
| シリーズ    | 歴史エピソード ジャンク船の南海進出<br>／深見 純生…………… 17                 |
| 図書紹介    | …………… 20   |

### 巻頭

## 外国で「世界史」を語る

青山学院大学教授 飯島 渉

(302) 世界史A 執筆者

### 外国で授業をする

年齢を重ねたからだと思うが、会議や資料調査などのため外国を訪れると、ついでに授業をしてくれと頼まれることが多くなった。言葉の面はもちろん、いろいろ大変なことも多いが、逆に、私が外国人の友人に授業してくれるように頼むこともあるので、このリクエストは断らないようにしている。

授業で話すトピックスは、専門的な内容のこともある。これはむしろ喋りやすい。けれども、一回限りの場合も多く、あまり専門的な内容を話すわけにはいかない。そこで、最近、Global History and National History (英語バージョン) あるいは「世界史与本国史」(「与」はandのこと、「世界史と自国史」、中国語バージョン) を用意しておき、大学の学部生を対象とする場合にはこの内容を話す。これは、今回の新しい教科書でも触れた「歴史を共有することは可能なのだろうか」(302 世界史A, 243 頁) という問いに関係がある。

多少順をおって説明する必要がある。この授業でまず話すのは、「私はなぜ歴史学を専攻したのか」、

そして「どのように大学教員となったのか」という話題である。前者は、勉強のきっかけ、後者は、歴史学の制度(とくに大学)にかかわる。授業はだいたい歴史学を専攻している学生を対象とすることが多く、この内容は導入としてうける。とくに、中国や台湾、韓国の学生の場合、なぜ日本人である私が歴史学、それも中国の歴史や東アジアの歴史を専攻し、しだいにテーマを変遷させていったのかという話題はそれなりに興味を引くようである。私は、中学か高校の教員になるつもりで教育学部に進学し、いろいろいきさつがあって、留学、大学院への進学をへて現在に至るが、その事情は別に書いたことがあるので、ここでは書かない<sup>1)</sup>。

### 日本史、東洋史、西洋史という制度

次に、日本の歴史学の制度について説明する。ここにいう制度とは、中学の「歴史」、高等学校「地理歴史」のなかの「日本史」と「世界史」、さらに、大学における「日本史」、「東洋史」、「西洋史」のことである。中国、台湾、そして韓国の大学は、日本と似た制度なので、このあたりは説明しやすい。但

し、韓国では「東洋史」とは中国史と日本史をさす。中国には、「東洋史」はなくて、「中国史」と「世界史」（中国史以外はすべて）にわかれる。その他の国ではかなりバリエーションがあるので、これを学生に質問して時間を稼ぎ、授業を進める。

いくつか強調することがある。まず、日本の東洋史に関して。日本の東洋史は、中国や朝鮮、モンゴル、さらに、東南アジア、南アジア、イスラームの歴史と多様である。日本の高校生が丁寧にこれを学ぶことを紹介する。また、アフリカは日本の学問分類では西洋史に入っている。明らかにおかしいが、紹介するにとどめ、のちの伏線とする。

中国や台湾、韓国の学生は、自分たちの制度と日本の制度がかなり似ていることに気付く。そこで、違っている点を教える。中国や台湾、韓国の歴史学と日本の歴史学の違いのひとつは外国史研究の有無にある。つまり、日本では、外国史研究がきわめてさかんで、山川出版社の『世界各国史』というシリーズの著者をほとんど自国でまかなうことが可能であることを教える。冷静に考えてみるとわかることだが、この蓄積は驚愕に値する。こんな制度と人材もっているのは他には米国だけである。

中国や台湾、韓国では歴史学とは事実上、自国史のことで、外国史研究はあまりさかんでなかった。もうすこし丁寧な説明が必要だろう。中国の歴史学はほとんど中国史だった。しかし、近年、大きな変化がある。外国留学の経験を経て、外国史の研究者が養成されつつある。台湾の状況はすこし複雑である。台湾の歴史学はながく中国史であった。台湾史は、これを研究したり、教育すること自体ができなかった時代が続いた。しかし、国民党の独裁が終わり、民主進歩党による政権交代がおこる前後から状況は動き（『認識台湾』という教科書の存在が大きかった）、中国史と台湾史が拮抗した。この状況は現在でも続いている。韓国の場合、外国史の中では中国史の位置が大きかった。それは歴史の問題であった。

なぜ、日本では外国史、つまり西洋史と東洋史がさかんなのか。授業では、次にこの問題を考えてもらおう。その答えはいろいろあるが、日本の歴史学がヨーロッパの歴史学を軸に実証主義的な研究を導入し（大学における歴史学）、イギリス・フランス・ドイツなどの西ヨーロッパ諸国を近代化のモデルとして国家建設、教育の制度化をはかったことが正解

の一つである（これを近代主義と説明する）。次に、日本が中国や朝鮮から大きな影響を受け、とくに、漢学の伝統を蓄積し、他方、19世紀末から20世紀の前半、台湾、朝鮮、樺太の植民地化、ミクロネシア、満洲、中国さらには東南アジアに関与したことが背景となっていることを紹介する（植民地主義）。そして、自国の歴史への関心を紹介する（日本主義）。こうした三つの流れの延長線上に、大学における日本史、東洋史、西洋史があり、高等学校の歴史に日本史と世界史があり、世界史は東洋史と西洋史からなりたっていることを教える。

ここで注目させるのは、外国史がさかんなところは、植民地をもったところだということである。イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、日本など、そうした国を除くと、外国史研究はほとんど存在していない。また、ここで、日本ではアフリカ史が西洋史に入っていることの意味に気付かせる。

戦後の世界史教科書の変遷をみると、世界史は、はじめは中国史とヨーロッパ史を合体させたものだった。しかし、東南アジア、南アジア、西アジアなどを対象とする研究者が養成され、その研究成果が参照されると、内容も変化した。10代後半を対象とする中等教育において、ここまで詳しく外国史、それも古代から現代までをまんべんなく教える国はほとんどない。これが、新しい教科書の「世界史への招待状」の中に書いた「世界史の秘密」である（同前、4頁）。そして、その背景には、近代主義と植民地主義の歴史がある。世界史Aの教科書を編集する際に、執筆者が一堂に会して、どこまで内容を詳しくするかを議論したことがある。そして、教科内容の充実に対応しながら、教科書をもうすこし厚く作りましょうという方針で一致した。こんなことがあるのはおそらく日本だけである。その意味で、日本の「世界史」は、豊かな内容と同時に日本の歴史が刻印された科目なのだが、外国での授業の際には、なかなかそこまで踏み込めない。

## 中国や台湾の「世界史」、韓国の「世界史」

次に、授業を受けている学生が、「世界史」でどんなことを勉強してきたかを質問する。これはいささか驚くことがらで、中国や台湾、韓国の高校生は日本の高校生とほぼ共通する内容を勉強してきている。それは、四大文明からはじまり、ギリシア・ローマ、インド、中国などの古典古代文明、中世ヨー

ロッパやイスラーム世界の展開にみられる地域的文明圏の展開、その後の大航海時代、西ヨーロッパの発展、産業革命などである。西ヨーロッパの発展については、イギリスの議会制度、フランス革命、アメリカ独立などが重要項目である。つまり、その内容は驚くほど日本の「世界史」と共通しているのである。

これにはいくつか理由がある。例えば、中国の世界史教科書では、マルクス主義に特別な配慮がはらわれているが、マルクスやエンゲルスを説明するためには、産業革命に言及しなければならないし、フランス革命にもふれる必要がある。

印象的なのは、今日、歴史認識問題として、日本と中国、日本と韓国のあいだで、つねに歴史的事実の認定やその評価をめぐる緊張関係（これは、日本と台湾のあいだに同様の問題がないという意味ではない）があるにもかかわらず、拍子抜けするほど、「世界史」の内容が共通しているのはどういうことか、ということである。

この背景には、日本の「世界史」が中国や台湾、韓国における「世界史」に大きな影響を与え、その教科書が意識するとしないと関わらず、日本の「世界史」が事実上ある種のスタンダードを提供していることがある。授業の中で質問する。「なぜ、君たちはかくも遠い、しかも大昔のギリシアやローマの歴史を勉強しなければならなかったのか」と。

## 歴史をめぐる対話

歴史認識問題が表面化したのは1980年代のことであった。その焦点は高等学校教科書の記述にあった。その後、繰り返し問題が惹起されたが、つねに問題となったのは、主として日本と中国のあいだの歴史的事件、日本と韓国のあいだの歴史的事件であった。日中戦争のなかで引き起こされた南京での虐殺事件の記述や韓国併合をめぐる外交的な正統性の記述が問われたのであった。

こうした状況の中で、その対立を克服するべく、日本と韓国のあいだで二期にわたって歴史共同研究がおこなわれている<sup>2)</sup>。また、日本と中国のあいだでも同様の試みがある<sup>3)</sup>。これらは、政府があとおしする双方の歴史学界の認識のすり合わせの試みだが、実際のところ、見解の相違はきわめて大きい。また、民間ベースでは、中国、韓国、日本の三国の共通教科書（教材）を作ろうとする試みもある<sup>4)</sup>。

この問題をめぐっては、いくつか指摘しておくべきことがある。ひとつは、歴史認識問題は、日本と中国、日本と韓国、さらに日本と台湾のあいだにのみ起こっているわけではないことである。中国と韓国のあいだで起こっている歴史認識問題の一つに、高句麗の歴史的位置づけをめぐる対立がある。中国の研究者が（但し、意見が完全に一致しているわけではない）、高句麗が中国王朝の一地方政権であったとする見解を表明したことに対して、韓国の研究者がはげしく反発した。ちなみに、北朝鮮の研究者もこうした中国の研究者の見解を批判している<sup>5)</sup>。

次に、歴史認識問題は、歴史学研究の方法の問題として、実証主義的な歴史学、すなわち史料（への記載）の有無によって史実を明らかにしようとする方法への懐疑を生み、歴史における記憶などの重要性が提起された<sup>6)</sup>。

こうした状況の中で、知見を学部学生にきちんと伝えるのはなかなか困難である。だからあまり欲張らないようにしている。また、気をつけるべき問題もわかってきた。例えば、中国語で授業をするときに、中国と台湾の関係に言及する際の言葉には十分に注意を払う必要がある。「中国」、「中華人民共和国」、「大陸」、「中華民国」、「台湾」、「台湾省」などの言葉は、それをどのような文脈で使うかによって明らかに価値判断を含む表現となる。授業の回を重ねる中で、そのことの重要性に気付いたので、かなり敏感な問題である台湾の位置づけについては、同じ授業の中でわざと違った言い方をすることによって、優秀な学生を煙に巻く方法を覚えた。優秀な学生ほど、こうした問題に敏感だからである。それでも、「台湾の独立に賛成するかどうか」をストレートに質問してくる学生もいる。授業のトピックがこうした問題とはおよそかけはなれた内容であるにもかかわらず、それを無視して質問する学生もいる。たいていは私の友人の教師が、その問題は本日の内容とは直接関係ないとして遮ってしまうことが多いが、「それは日本人である私がどう言うべき問題ではない」というのが私の回答である。この言い方は、「中国と台湾の問題に関しては口を出さない」という意味に解釈できるので、まあその場をやり過ごすことができる。しかし、この言い方は、一歩進めて考えると、「台湾の将来は台湾人が決めること」という台湾独立派の言説に近い解釈にもなるので、また注意が必要である。但し、授業では、用

意した回答以上のことは言わない。

## アフリカでの印象的な経験

授業では、あるエピソードを教える。それは私のアフリカ体験である。いまから10年以上も前のこと、アパルトヘイトが終焉した南アフリカのケープタウンで開催されたインフルエンザの歴史についての会議に参加するため、南アフリカを訪ねた。そこで、私ははじめて日本や東アジアの各地で生活する黒人の気持ちに思いをはせたのだが（南アフリカでは日本人はものすごく目立つ）、それはこの文章の本題から離れる。

ケープタウンでの忘れ難い経験は、アフリカにおけるインフルエンザの歴史を研究しているのが、一人の例外を除いて、イギリス人、フランス人、ドイツ人だったことである。これは、会議の主催者が植民地主義者だという批判ではない。実際のところ、そこで出会った多くの方々からいろいろなことを教えられた。その後、アフリカ史を専門にしている日本人の研究者（これはすごいことで、アフリカ史を専攻して飯が食える国は、アメリカ、イギリス、フランス以外にはほとんどない、パイは小さいとはいえ、日本もそうした国なのだ）から伺ったところでは、やはりアフリカ人がアフリカ史を書く、語ることが強調されるようになってきているとのこと。

このエピソードを紹介するか否かはそのときの状況による。学生の顔を見れば、どのくらい理解しているのかは自ずとわかる。そして、紹介可能だと判断した時には、この話をしたあとで、次のように説明する。「歴史をめぐる対立、論争があるのはある意味では当然である。しかし、一方では、その対立は、ある種の世界史への共通理解があり、そのため対立や論争もあるのではないか。そして、その共通の基盤の一つは世界史なのではないか」と。学生が分かっていないと思う場合には、スキップする。学生の中には自分たちがアフリカと同じレベルだと言われたと誤解する学生がいるからである。こうした誤解はまちがいがなく人種主義的の偏見にもとづく。とくに、日本人をふくむ東アジアの学生のアフリカへの偏見はかなり深刻である。そのため、実際にそうした失敗をしたことがある。もっとも、最近では、中国の広州に数十万人のアフリカからやってきた商人がいる。そして、アフリカ各地には100万人以上の中国人の技術者や労働者がいる。状況は、予想よ

りもはやく動くかもしれない。

## 「歴史の共有」と「世界史」

日本が抱えている歴史認識問題とは、実際のところ、「日本の日本史」と「中国の中国史」、「日本の日本史」と「韓国の韓国史」、すなわち、自国史どうしの見解の相違がクローズ・アップされ引き起こされているのではないか。それは、自国史、すなわち、ナショナル・ヒストリーのぶつかりあいなのだから、その認識のすりあわせはなかなか困難である。実際のところ、双方の学界レベルでのすりあわせもうまくゆかないというのが現実なのである<sup>7)</sup>。

歴史認識をめぐる議論では、ドイツとポーランドとのあいだでの歴史認識をめぐる対話や対立の克服の試みが参照されることが多い。しかし、ヨーロッパとしての文化的な共通基盤をもつ社会におけるところもと日本と中国、日本と韓国のあいだのこのこみと同じ次元で議論することはできないように思われる。

こうした中で、歴史を共有するきっかけの一つは、「世界史」なのではないかと考えるようになった。今回の教科書の改定に際して、グローバル化のなかで、世界史は「現代世界を生きていくための大切なスキルである」と書いた（同前、4頁）。この思いは、外国で授業をした経験から得られたものである。こう書くと、何かたいへんな成功事例のようにとられがちだが、実際には失敗の連続で、最初のうちは、言葉のあげ足をとるような質問をしてくる学生に悲しい思いをしたり、内容が難しかったためか、散々な失敗も経験した。もちろん、言葉の問題も大きい（何せ、「ああでもない、こうでもない」と言って、ごまかすことができない、シンプルにしか表現できない）。そして、それぞれの地域の歴史のコンテキストを十分に理解しないまま喋ってしまうと学生が混乱することがわかった。

そして、漢字は難しい。バーナード・ショウは、「イギリスとアメリカは英語によって隔てられている」と説いた。ここから学んで、私は、「日本と中国は、漢字によって隔てられている」と言うことにしている。つまり、「封建」とか「地主」とか、漢字で表現されるタームを簡単に使ってしまうと、そこに誤解が生まれやすい。

それでも、ハッとする経験もしていて、中国や韓国、台湾の学生にとっても、日本とのあいだに歴史

の対話のためのチャンネルを確保しておくことは大切だと意識されていると感じる。この経験は、その後のビールを蜜の味にする。これだからやめられない。

## 「東アジア」の罫

授業の中で、韓国や台湾の学生と日本の学生にはかなり共通性があると思うようになった。中国の学生はなかなか難しく、同じだと思ふ時と、違うと思うことが半々くらいである。その意味で、東アジアの共通性というものはあるのかもしれない。アメリカの学校での経験はまだないので、もし機会があったら断らないようにしたい。ドイツでの経験で言うと、最近のEUの未来への懐疑もあって、私が東アジアの比較の対象として、ヨーロッパの共通性を強調すると、不満そうな学生が多い。このあたりもなかなか難しい。

東アジアという言葉は、高校の世界史や日本史の教科書の中でもよく使われる。歴史的には、中国、朝鮮、琉球、そして日本、場合によっては、モンゴルとベトナムが入るだろうか。一般的には、中国、台湾、南北朝鮮、そして日本とすることになるだろう。そして、この言葉には、日本を東アジアの中に位置づけようというポジティブさが含意されている。

しかし、重要なことは、日本の文脈の中では、中国はたしかに東アジアなのだが、中国の文脈には、「東亜」（東アジア）という言葉はあるものの、自己意識として自分たちが東アジアに属していると考えたことはほとんどないということである。つまり、ある時期さかんに言われた「東アジア共同体」は、じつに日本的な表現であった、中国は、つねに自らを東南アジアとの関係の中に位置づけようとしてきたし、また、北東アジアや西アジアとの関係の中にも自らを位置づけようとする。そうしたコンテキストの一つとしてあくまでも東アジアがある。つまり、「大東亜共栄圏」は同床異夢どころか、同床でもさえなかったのだが、これも余計な話。

## 「世界史」の可能性

話を本筋にもどす。私は、ある時期から、この授業の内容を日本の学生にもしてみることにした。強調するのは、日本では東洋史と西洋史として外国史研究がさかんだが、これには植民地主義と近代主義の歴史があること、これを基礎に、歴史学という制度がかたちづくられてきたという事柄である。そし

て、日本で話をするときには、この制度はかなり疲労していて、外国史の研究自体が衰えつつあるのではないかと付け加える<sup>8)</sup>。

しかし、グローバル化の進展の中で、もっとも必要とされるスキルが「世界史」であることは言を俟たない。そして、日本の歴史学や「世界史」が中国や台湾、韓国にも大きな影響を及ぼしてきた事情を考えると、「世界史」は、周辺地域との関係を構築するためのソフト・パワーとしての意味を持っている。こうした仕掛けとして「世界史」を考えると、研究と教育に課せられた課題は大きい。

日本の大学における歴史学が直面している最大の問題の一つは、大学院生の増加の中での絶対的なポストの不足である。これは、日本史、東洋史、西洋史に共通する問題なのだが、これを解決する方法は外国の大学への人材の輸出である。もし、これが実現して、中国や台湾、韓国さらには諸外国の大学で教える人材を養成できれば、歴史認識問題はちがった様相を見せると思うのだが、どうだろうか。あるいは、私たちの世代がある年齢になったところでそうしたアクションを起こすことも必要だろう。そして、そこで得た知見が日本の「世界史」にフィードバックされるとすれば、「世界史」にはまだまだ可能性があると思っている。

- 1) 飯島渉「Yさんと中国の現代史」東京大学出版会『UP』442号、2009年8月。
- 2) 日韓文化交流基金HP  
<http://www.jkcf.or.jp/projects/kaigi/history/>
- 3) 外務省HP  
[http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/rekishi\\_kk.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/rekishi_kk.html)
- 4) 《東亜三国的近現代史》共同編写委員会『東亜三国近現代史』社会科学文献出版社、2005年
- 5) 安妍宣「共有された高句麗の歴史と文化遺産をめぐる論争」（鈴木梨恵子訳）近藤孝弘（編）『東アジアの歴史政策—日中韓 対話と歴史認識』明石書店、2008年
- 6) 赤坂憲雄・玉野井麻利子・三砂ちづる（編）『歴史と記憶—場所・身体・時間』藤原書店、2008年、参照。
- 7) 日韓に関して、小森陽一ほか（編）『東アジア歴史認識論争のメタヒストリー—「韓日、連帯21」の試み』青弓社、2008年、劉傑・三谷博・楊大慶（編）『国境を超える歴史認識—日中対話の試み—』東京大学出版会、2006年。
- 8) 飯島渉「『中国史』が亡びるとき」『思想』2011年8月、第1048号。